

「水の洗礼、聖霊と火の洗礼」

2015年04月30日

ルカによる福音書 3章15節～20節。民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」ヨハネは、ほかにさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。

洗礼者ヨハネの悔い改めの洗礼運動は、民衆に大きな感動を与え、新しい時代の到来を予感させた。ヨハネは待ち望んでいたメシア（救い主）ではないかと期待されるようになった。それを察知したヨハネはきっぱりと否定する。私は水で洗礼を授けている者に過ぎない。私より遥かに優れた方が来られる。私は、その方の靴の紐を解く、奴隷の務めさえできない。私の洗礼は自然の水であるが、その方は神の聖霊と火で洗礼を授ける。そしてその方は、手に箕を持って、麦を倉に納め、殻を火で焼き払われる。ヨハネは、私はメシアではなく、後から、天と地ほどの違いがある神の力を持って働かれる方が来られると明言した。福音書は、ヨハネは人々の心を神に向けさせ、主イエスの歩まれる道を備える者として、神から遣わされたと位置づけている。だから「福音の初め」なのである。

ところが、民衆のヨハネに対する尊敬は絶大であった。ヨハネは真っ直ぐに神に向き合い、神のみを証した。領主ヘロデの律法違反を責めたため、斬首されたヨハネは、時代が下がっても、厚い尊敬を受け続けた。100年前後に書かれたヨハネ福音書3章に、歴史的事実とは違うが、興味深い記述がある。ヨハネと主イエスは共に洗礼活動をしていた。すると、民衆は大挙して、主イエスの所に集まるようになった。活動が細っていくことを心配したヨハネの弟子は「みんながあなた（主イエス）の方に行っています」と進言する。ヨハネは「わたしは、『自分はメシアではない』と言い、『自分はその方の前に遣わされた者だ』と言った。（中略）あなた方は栄え、わたしは衰えねばならない」と、主イエスは天から与えられた方で、当然栄えるが、地にある私は衰えていく、これでいいのだと答えている。エルサレム教会が誕生して70年も経っていたが、救い主はヨハネではなく、主イエスであると書かねばならないほどヨハネへの信望が篤かった訳である。ヨハネは主イエスを先導しただけで、救いは主イエスから来る。主イエスを指差し、自分は埋もれていくことを「よし」とした。

時の領主ヘロデは兄の妻ヘロディアを自分の妻とした。レビ記18章16節に「兄弟の妻を犯してはならない。兄弟を辱めることになるからである」とある。ヨハネはヘロデの律法違反を責めたため、怒りを買って、牢に閉じ込められた。ヘロデは悪事をまた一つ加えることになった。ヘロデの誕生祝いの宴席で、妻ヘロディアの娘を用いた策略によって、ヨハネを斬首する。何者も恐れないヨハネは神を望み、律法に殉じて逝った。ヨハネは信仰者の鏡で、この信仰に自分の地位や名誉に、そして死にもこだわらない真の解放がある。